
夜と学校とトモダチ

カナイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜と学校とトモダチ

【Nコード】

N1987E

【作者名】

カナイ

【あらすじ】

その日、私は学校に忘れ物をした。それも、次の日の一時間目に提出しなくてはならない問題集を。夕飯を食べているときに母に宿題をしているかどうか聞かれ、問題集を忘れたことに気付いた。そのことを言うと、母は怒り、父は学校まで車で連れて行ってくれると言った。暗い校舎の中で私は友人の、あこちゃんに会った。

——
夜

この言葉は人を引き付ける。

怪談は大抵が夜の出来事。

もちろん学校の怪談もそう。

学校は夜、完全に人の気配が消える。

そこで、人でないものたちが動いているかもしれない。

しかし、誰も本当のことは分からない……

その日、私は学校に忘れ物をした。それも、次の日の一時間目に提出しなくてはならない問題集を。夕飯を食べているときに母に宿題をしているかどうか聞かれ、問題集を忘れたことに気付いた。そのことを言くと、母は怒り、父は学校まで車で連れて行ってくれと言った。

「ここで待っていてやるから、さつと行って、さつと帰って来い」
「ん、ありがとう」

私は車から降りると、生徒玄関横にある用務員室へと向かった。扉をたたくと、用務員の人はすぐに出てきてくれた。

「あの、教室に忘れ物をしてしまったんですが」

「あゝ、どうしても今日中に必要？」

少し面倒くさそうな用務員さんに、私は頷いて見せた。

「はい」

「何年何組？」

「二年三組です」

「じゃ、生徒証見せて」

私が生徒証を見せると、用務員さんは頷いて、用務員室へと戻っていった。

「はい、じゃあ、これに名前書いて」

次に用務員室から現れたとき、用務員さんの手には名簿と懐中電灯、そして鍵があった。

「はい、じゃあ、これ鍵ね。それと、はい、懐中電灯」

「えっと？」

私が戸惑っていると、用務員さんが説明してくれた。

「今の時間は校舎内では電気使っちゃいけないことになってるからね」

でもそれは、私がほしかった説明ではなかった。

「いえ、あの、私ひとりで行くんですか？」

「そうだよ」

「……」

私はうな垂れて校舎の中へと足を踏み入れた。

校舎の中は当たり前だが、とても暗かった。そして、外は暑いというのに、とても涼しかった。

走るのはなんだか気が引けて、私は早足で教室まで歩いた。

教室の自分の机の中から例の問題集を見つけて手にとった時、私はなんだか肝試しの折り返し地点に来たような、ちょっとした達成感と安心感を得た。まあ、つまるところ、私は気を抜いていたわけだ。そこで、唐突に物音がすれば、誰でも驚くだろう。私はその物音に飛び上がらんばかりに驚いた。

「あ、あれ？誰かいるの？」

その物音というのは、誰かが開いていた教室の扉から入るときに

扉に手を添えた音だった。入ってきた人物は戸惑ったように声を上げた。私はとつさにその声のする方へ懐中電灯の光を向けた。

入ってきたのは女の子だった。そして、私はその子の名前を知っていた。その子は、友達だった。

「あこちゃん……」

「えつと、ごめん。顔がよく見えないんだけど……誰？」

「私だよ、私。マナミだよ」

あこちゃんは安心したように笑った。

「マナミちゃんは、忘れ物？」

「うん、そう。問題集忘れちゃって」

あこちゃんはくすくすと笑った。私も笑った。一瞬、ここが夜の学校だということも忘れかけた。

でも、そのことをすぐに思い出させたのは、あこちゃんの一言だった。

「でも、早く学校から出たほうがいいよ。知ってる？この学校の怪談」

「ううん」

私が首を横に振ると、あこちゃんは急に笑うのをやめて、言った。「夜になってから人がこの校舎に入ると、消えちゃうんだって……」

私はぞつとした。もちろん怪談にもだが、主にあこちゃんにだ。

その声は冷たくて、さっきまでの明るい感じは消えてしまっていた。私は少し怖くなって彼女を呼んだ。

「あ、あこちゃん？」

でも、彼女は私に答えなかった。急に振り返ると教室を出て行ってしまった。私も急いで教室を出て、彼女を追った。特に何かを考えての行動ではなかった。頭が妙に重く、痛くなり、ただ、体だけが前へと進むような感覚があった。

彼女は階段を上り、三年生の教室の前をとおり、この学校で唯一、屋上へと至る階段を上ろうとしていた。

「あこちゃん！」

私は再度彼女の名を呼んだ。すると、今度は反応が返ってきた。彼女は勢いよく私の方へ向くと、驚いたように目を見開いた。

「あこちゃん、どこ行くの？屋上？でも、あそこは立ち入り禁止だよ？」

「マナミちゃん、来ないで。あたし呼ばれてるの。行かなきゃ。でもマナミちゃんは来ちゃダメ。あたしも、誰も、マナミちゃんを呼んでない」

あこちゃんは私を睨むようにしてそう言った。

「呼ばれてる？誰に？」

「トモダチ」

私は何がなんだかまったく分からなかった。私はもつとよく聞こうと思い、あこちゃんに近づこうとした。

「だから、マナミちゃんは呼んでないし、呼ばれてないの！」

あこちゃんは私を勢いよく突き飛ばした。

私の意識はそこで一度途切れる。

「ちょっと！大丈夫かい？」

私が目を開くと、そこは階段の踊り場だった。私は踊り場の中心で仰向けになって倒れていた。

「目、覚めましたよ」

用務員さんが背後に声をかけた。そこには携帯電話を持った父がいた。

「どうやら目が覚めたみたいだ。ああ、じゃあな」

携帯電話をたたくで父は私を睨み付けた。

「お前が学校に入ってからもう一時間以上たってたぞ。まったく、いったい何してたんだ、こんなところで」

私は混乱しながら身を起こした。そして、混乱したまま、名簿に丸をつけて、家に帰った。問題集は持って帰ってきていたが、宿題もせずにその夜はすぐに寝た。考えることが多すぎて頭の中が混沌としていたからだ。

下校時刻を過ぎてから校内へと入る生徒が記名する名簿にあこちやんの名は無かった。

私はあこちやんがどのクラスにいたか、分からなくなっていた。

次の日、私は学校で友人のアユカにあこちやんのクラスを聞いてみた。アユカの答えはこうだった。

「は？あこちゃん？誰よ、それ」

他の友人たちに聞いてみても、誰もそんな人物は知らないという。同学年だけでなく、先輩にも、後輩にも、そんな人物はいなかった。私のトモダチ、あこちゃんはいなくなっていた。

・
・
・
・
・
・

「母さん、それって、本当にあつた話？」

娘が夕飯の鮭をつつきながら、上目遣いに聞いてきた。

「さあて、どうでしょう？」

私は娘に向かって笑って見せた。

私が通っていた中学校に娘もまた通っている。今度クラスのイベントで肝試しをするらしいので、私の実体験を話してみたのだ。

ちなみにあれから、あこちゃんを再び見ることは無かった。

ふと見ると、娘の顔が心なしに青くなっている。

「ねえ、うそだよね？ね？」

「その辺はアキのご想像にお任せします」

「うそだつて言つてよお。だって、あたし、今日先輩に聞いちゃったんだもん」

娘は泣きそうな顔で言つた。

「うちの学校の怪談にね、……つてゆうのがあつて……」

私は大皿に伸ばそうとしていた右手を一瞬止めた。そして、表面上は平静を装つた。

「あ、でも、母さんがあの学校に入つたのつて。年だったよね？先輩の話じゃそれよりも前からあるみたいなこと言つてたから、母さんも知つてたんでしょ。もう、びっくりしちゃつた」

肝試し不参加にしようかと思つた、と娘は陽気に笑いながら言つた。私は体を這い上がる悪寒を止めるのにとてつもない精神力を使つた。

あこちゃん、あなた、本当に私の友人だった？

あこちゃん、あなたの氏名を私は覚えていない。

あこちゃん、あなたと私はいつ知り合つたの？

あこちゃん、あなた、本当に私のトモダチだった？

—— うちの学校の怪談にね、

『夜の学校に人が入ると、「トモダチ」に呼ばれて消えて

しまっ

ってゆうのがあって、「トモダチ」の名前は……

あこちゃん、あなた、本当に在^いたの？

—— 学校

そこは、一つの閉鎖された空間。

それは、ある種の異世界。

そこで起こる、何が現実なのか分からない。

あなたの隣にいる人は、本当に存在しているのか？

あなたは本当に現実に存在しているのか？

しかし、それを確かめる術は誰も知らない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1987e/>

夜と学校とトモダチ

2010年11月14日09時21分発行